The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 第5回哲学プラクティス国際学会に参加して |
| Author(s) | 中岡, 成文 |
| Citation | 臨床哲学のメチエ. 1999, 4, p. 4-7 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/8356 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 第５回哲学プラクティス国際学会に参加して

中岡成文

「フィロソフィカル・ディナー」にて

哲学プラクティス（哲学カウンセリング）の国際学会が今年はオックスフォード大学で開かれた。数えて第５回目の今回、大会を主催したのは「コンサルタント哲学者協会」を名乗るイギリスのグループである。かれらはとくに子どもを対象とした哲学教育の可能性を熱心に追求している。日本からは、昨年の初参加に引き続き、大阪大学大学院文学研究科から私を含めて５人が参加した。本大会の前に、「ソクラテス的対話」を習得するワークショップがプレ・カンファランスとして開かれたので、ヨーロッパでは有力な方法論とされているこの「対話」にも触れてみた。プレ・カンファランスは７月24日から26日までオックスフォード大学のウォダム・カレッジで開かれた。カレッジというのは大学（ユニヴァーシティ）を構成する単位であり、学寮と訳すらしい。がっしりした造りの門をくぐると、右手にある門衛の部屋で、割り当てられた居室の鍵をもらう。ふだんの住人で、いまは夏休みで帰省中であろう学生たちにかわり、寝泊まりしながら、ワークショップや講演に臨むのである。なお、本大会では、ウォダムから歩いて５分ほどのところにある、ケブル・カレッジも使用された。

## ソクラテス的対話――ファシリテーター・ワーカブルな問い・定義

ソクラテス的対話について詳細は他の報告に委ねるが、私の気づいたことも若干述べさせていただきたい。

どんな討論でもそうだが、この「対話」ではとくに、ファシリテーター（進行役）の手腕が重要である。すべての参加者に十分自己主張させながら、他のメンバーの言い分にも耳を傾けることを要請し、勝手な発言に対しては厳しくディシプリン（規律）を徹底させなければならない。

参加者はいったん発言すれば、補足説明の要求や修正意見、反論の十字砲火に耐えなければならない。ファシリテートするオランダのボルテンもその例外ではない。すでにカウンセラーとして自立し、「対話」の進行役を経験した参加者も多いので、ボルテンの対話のさばき方に対しても、遠慮のない批判があちこちから飛んでくる。このまま先には進めないとかれが判断すると、対話の進め方（「戦略」）についての対話、つまりメタ・ダイアローグに切り替えられる。

全員の出した事例の中から、今回の「対話」（「理解と誤解」がテーマ）の焦点となる事例をひとつにしぼり、ついでその事例

と関連した哲学的な「問い」もひとつにしぼる。知的にスマートな事例や問いはいらないと、繰り返しボルテンは注意した。みんながそれぞれの立場からいろんなことがいえるシンプルな事例、作業しやすい（ワーカブルな）問いがいいのだと。しばしばみんなの議論がかみ合わないことがあるが、突き詰めていくと、けっきょく「理解」とか「誤解」という言葉についての理解が、人によってまちまちだかららしいとわかる。そこで、「理解」ないし「誤解」をまず定義しようという提案がノルウェーのオラフから出された。しかしボルテンはこれを却下した。「机の上で作業するのに、＜机とは何か＞を定義する必要はあるか。ないだろう」。オラフの反論「いや、哲学者としてはその定義は必要だ」。ボルテンの再反論「そんなことはない、机はそれとして具体的に指し示せれば十分だ」。オラフの再々反論「それなら、「問い」のひとつとして誰かが提案した「理解とは何か」はどうだ。これは、あなたが不必要だという、定義を求める問いではないのか」。オラフの指摘は論理的にはかなり核心をえぐっていたと思うが、ソクラテス的対話のリズムとは相容れないのも確かなようだ。「対話」は意味そのものを求心的に掘り下げることを狙わず、むしろ参加者の共同作業（ワーク）に資する「ワーカブル」な手段のみを要求するらしいから。ともかく、ボルテンはファシリテーターの権限でこの議論を打ち切り、定義抜きで「対話」を続けることに決めた。

## 本大会始まる

7月27日から哲学プラクティスの第５回国際学会が開かれた。参加者全員が集まる（プリーナリーな）講演以外は、６つの会場に分かれてセッションが持たれた。日本から行った私たちは、できるだけ分散して、数多くの講演・ワークショップに触れるように努めた。

主催者を代表してマリス（Dr. Karin Murris）が開会の辞を述べた。彼女はみんながファーストネームでカリンと呼んでいるが、オランダ出身らしい。オランダの哲学プラクティス協会のイギリス支部が近年独立してイギリス協会となった、その中心メンバーのひとりである。

午後６時より、オックスフォード市庁舎でレセプション。市庁舎の受付係が、「市長は来られなくなったが、みなさんはかまわず会場に行って、用意してあるワインをどんどんやってくれ」というのでびっくりしたが、オックスフォード流（？）の無骨なジョークと判明。ワインを片手に、昨年ドイツで顔なじみになった人々とあいさつを交わす。見回すと、昨年とはかなりの割合で顔触れが入れ替わっている。発表者をみても、地元イギリスは別として、オランダ人が多く、ドイツ人はほとんどいない。とくに、国際哲学プラクティス協会の会長であるＧ・アーヘンバッハが今年欠席したのは、意外だった。初対面の人としては、香港出身でカナダ・トロントの病院に勤めるＳ・チャンに紹介された。彼はガン専門のソーシャル・ワーカーとして長年患者さんや家族と接してきて、哲学的な問題の大

オックスフォードの運河にて

切さを痛感し、それで現在ウェールズ大学で「時間と死」についての博士論文に取り組んでいるのだという。レセプションのあとはまたウォダム・カレッジに戻って、敷地内（！）のバーで、美しいイングランドの夏の夜を愛でた。

講演のうち、印象に残ったものをいくつか紹介したい。まず、R・スミスの企業コンサルタントに関する講演。欧米では、哲学者が企業コンサルティングをやる例は少なくない。哲学者が企業家にいったい何を言えるのかと懐疑的になる人も多いだろうが、スミスによると、企業のトップたちは、ふだんはお互いの失敗をあげつらうのに忙しく、じっくり話を交わす機会がまったくない。哲学者が介入して「対話」をするように仕向け、管理者たちがお互いに、また部下の者たちに対して接するその態度をより liberalize するだけでも、十分意味があるということだった。また、相手を自立に導くのが哲学カウンセリングの目的だという観点から、「コンサルタントは最後は自分を余計な者にしなければならない」と述べていたのも、注目された。

つぎにC・K・ムッシュのヘルスケア組織論についての講演。彼は現在ヘルスケア・コンサルタント業に携わっているが、今回の話自体は、ヘルスケアに特有の事例とはいえない。阪大の臨床哲学で交わされているようなケアの本質論を問う姿勢は見られなかった。「合意とは、意見が一致しなくてもかまわないんだということで意見が一致すること(agree to disagree)」というのは、じっさいの場になるとこれですまないのは目に見えていても、表現としては鮮やかだった。また、リーダーの資質を重視して、「リーダーは注意深く耳を傾けなければならないが、組織に対しては「ストレンジャー」である。なぜなら、彼は組織についてのストーリーを語るのが務めで、そのためにはその組織について突き放した知識を持っていなければならないからだ」と述べたのも、私には印象的だった。

## 哲学カウンセリングの存在理由

リンドセットのセッションも実り多いものだった。彼は、ガンのため発表断念を余儀なくされた、アメリカのヴォーナ・フィアリーの代打である。司会のコミカルな紹介によると、リンドセットは「我らのテディベア」であると同時に、「世界最北に位置する大学」の教官でもある。つまり、かれはノルウェーのトレムソ大学に勤めているが、ミュンヘンに住み、同地でクリニックを開いている。リンドセットは医療系の学部に所属していて、家族療法で世界的に有名なトム・アンデルソンとは同僚だそうである。アンデルソンの関わった事例を二つあげて、彼が「治療」を追求しておらず、解釈学的手法をとる点で、哲学カウンセリングと一脈通じているとリンドセットは指摘する。ただ、アンデルソンと哲学カウンセリングとの違いは、前者がふつうの対話を交わすことを目指しているのに対し、後者はクライアントの言説に批判的に関わり、「隠れた公共的次元」を明らかにしようとする点にある。哲学カウンセリングが哲学の「適用」であるのは確かだが、固定された確実な適用ではなく、むしろ被り（suffering）が逆に哲学に適用し返されるのである。このようして哲学は、自己の存在理由を証示してみせなければならない。

講演後の質疑応答で、チャンは、リンドセットが「隠れた意味」を哲学は探し出すといったが、それはいったい「誰の意味」か、哲学者が外から持ち込む意味ではないのかと問うた。ソーシャルワーカーである自分だったら、あまり患者や家族の「意味」

の次元には立ち入らないという。リンドセットは反論して、ヘーゲルの「具体的普遍」の説を引きながら、自分があげた事例で、「意味」はけっして哲学者が持ち込むのではなく、患者自身の話の文脈の中にある。もともと文脈に内在するその次元を明確化するのが哲学者の役割である。哲学カウンセラーは具体的なストーリーから乖離しないことが肝心である。とくに分析系の哲学などは、実在論をめぐる論争を見てもわかるとおり、生の文脈から離れた「無駄なゲーム」（lost game）を演じがちだが。

質疑応答では、哲学カウンセリングと精神療法との違いも論じられた。イスラエルのシュスターが精神療法の臨床家たちは開放的なふりをしているだけだと非難したのに対して、スウェーデンから来た２人の精神療法家が鋭く反論した。そのうちの１人は、精神療法と哲学が違うのはわかるが、リンドセットの「対話」という言葉の使い方は、対話の誤用ではないか。一方（カウンセラー）がただ聴くだけというのは、対話のルールである相互性を犯すものではないか、と尋ねた。この異論に対し、リンドセットは、哲学カウンセリングでも話が実り多くなってくると、両者（カウンセラーとクライエント）が同じレベルに近づき、同じようなことを考えていたことが判明するのだ、と答えた。両者は抽象的な議論のバトルをしているのではなく、具体的な関心事にコミットして対話しているのであるから、カウンセラーが「主観的」な意味づけを一方的に加えているのでは決してない。そのような捉え方は、カウンセリングの現場を知らない、ためにする抽象論だというのであった。

ちなみに、哲学カウンセリングと精神療法の相違は、大会最終日のヴァン・ダーゼン（van Deurzen）の講演のテーマでもあった。ヴァン・ダーゼンはイギリス精神療法界の中心人物の１人であるが、以前は哲学を専攻したこともあって、哲学カウンセリングと精神療法はお互いに必要としあっているという意見だった。

講演以外で印象に残ったことをひとつ。フランスのジェラール・ティシエは故マルク・ソーテと共に哲学カフェを広めた人物であるが、討論の素材としてはむしろ映画を使うのがいい、つまりカフェ・シネマだと熱心に語っていた。もちろん、彼は自分でそれを実践していて、最近、日本映画では役所広司主演の「うなぎ」を使ったという。

哲学プラクティスの国際学会、次回は２年後の2001年にオスロで開催されることが決まった。また、オックスフォードの大会のおりに、インターネットを活用して恒常的に意見交換をする態勢が作られた。ただ、その後の推移を見ていると、私自身を含めて、ネット上の議論を敬遠する人も少なくないようである。

（なかおかなりふみ・教授）